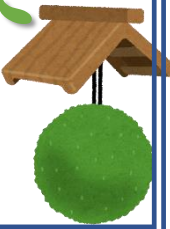


## アトリエ 琉游舎 だより 145号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2023年1月18日発行

極楽は何処の里と思ひしに  
杉葉立てたる又六が門

- 約2ヶ月ほど琉游舎だより並びに琉游舎の活動を休止していましたが、本号をもって琉游舎だよりをまた以前のように隔週の水曜日に定期発行を致します。宜しくお願いいたします。
- 「極楽は何処の里と思ひしに杉葉立てたる又六が門」これは一休宗純、とんちで有名な一休さんの作といわれているものです。杉の葉を材料にして酒屋さんの軒先につるされている球体が杉玉や酒林と呼ばれるもので、お酒好きの一休さんが、「極楽はどこか遠くにあるものではなく、例えば杉玉をつるした酒屋さんも私には極楽ですよ」と詠んだもの。
- 極楽を西方浄土に見る考えもありますが、私の仏教では極楽も地獄もこの私たちの生きている世界、突き詰めれば私たちの心の中に立ち現れる場所が極楽であり地獄なのです。娑婆即寂光土（極楽）。一休さんも日常を豊かに楽しく味わおうよと詠んだ歌のようです。
- 2ヶ月前、私はこの一休さんの歌を見つけて、145号の冒頭に引用しようと思いついた翌日に、大動脈解離A型を発症し倒れ緊急手術を受けました。この病は死に至る危険が非常に高いものだったのですが、幸い2週間後に退院ができて、今に至っています。
- 恐らく地獄の閻魔大王からまだおまえの来るところではないと追い払われ、お釈迦様からは、この娑婆でおまえの極楽を見つけて歩んでいかなければならないよと諭され、引き戻された結果が、今の私が生きているありのままの姿なのだろうとはっきり知った次第です。
- まだ、以前のような体力や気力に戻るには、もう少し時が必要のようですが、私の極楽を目指して、これからも信行の道を歩み続けたいと思います。ところで、身近な極楽のはずの酒屋さんはまだ医師から一日1合限りときつく告げられています。私の手近な極楽はまだ少々先の方なのですが、日一日とその極楽が近づいていることが実感できる快復の毎日です。

## 1・2月スケジュール

| 月  | 火                 | 水    | 19<br>映画会<br>お休み  | 20 | 21 | 22               |
|----|-------------------|------|-------------------|----|----|------------------|
| 23 | 24                | 25   | 26<br>映画会<br>お休み  | 27 | 28 | 29               |
| 30 | 31                | 2月1日 | 2<br>映画会<br>お休み   | 3  | 4  | 5<br>写経会<br>13時半 |
| 6  | 7                 | 8    | 9<br>映画会<br>13時半  | 10 | 11 | 12               |
| 13 | 14<br>読書会<br>13時半 | 15   | 16<br>映画会<br>13時半 | 17 | 18 | 19               |
| 20 | 21                | 22   | 23<br>映画会<br>お休み  | 24 | 25 | 26               |

## 活動再開

2ヶ月ほど休止していた琉游舎の活動を再開します。皆様のお越しをお待ちしています

## 写経会

2/5(日) 13時半

## 読書会

2/14(火) 13時半

2017年9月3日発行のコーリーナだより第8号に「狂言綺語」と題して当欄を書き始めた私の信行の日々と宗教観は隔週原稿用紙5枚程度に書き綴ること5年間、前回までに127回を数えることとなりました。「狂言綺語」は表面を飾った言葉や道理に合わない言葉として中世、仏教・儒教の立場から詩歌・小説・物語や、さらに歌舞・音楽などを、批判的にいう語でした。ところが白居易の「白氏文集」に〈狂言綺語の過ちを転じて……讃仏の因となさん〉とあったことから、平安時代以降、和歌や物語が逆に仏教の修行に繋がりこれを助けるとする考えが起りました。私がこの言葉を表題に用いた理由は、仏教の教えがあまりにも正しすぎて私たちの生活の実感と大きくかけ離れてしまった中で、僧侶が死の場面、つまり葬式仏教の中でしか存在できない現状を、もう一度私自身の日々の生活から考え直してみたいと考えたからです。仏教の教えから見れば私たちの日常は方便と道理に背いた言葉と巧みに表面を飾った狂言綺語のやりとりをコミュニケーションと名付けて成立している世界です。この世界の善し悪しを評価するのではなく、ありのままの世界とみてそこで釈迦様の教えを実践（生活）する日々を過ごすこと、これが私の信行と信じることがこの欄の出発点です。

バックナンバーを紐解けば、実は初期の頃から私の語ってきたことに変化はありません。基本的考えは、日々を「ありのままに観て（縁起）」釈迦様の教え（法灯明）のままに「願い、誓い、行い」安らぎの処（涅槃）へ向かうために毎日を生きたこと、そして、それが永遠のいのちをつなぐことと信じること。これが私の仏教者として生きることの根底を通奏低音のように流れる音です。つまり生きる（生活する）ことはその日々を惜しみなく豊かに安らかに過ごすことと悟ることです。それは永遠のいのち（久遠実成の釈迦牟尼仏のいのち）と私の命（個体としての生命）との幸福な一体化の実現です。仏教の生命観では個体の身命がありとあらゆる宇宙の存在と連携し互いが連絡し合って法界（仏様の教え）を作り上げているのです。個体の生命は大いなるものによって生かされ互いに縁起の法則によって連携が図られ、無数の生きとし生けるものを通じて物質的にも精神的にも相通じ合っておりそのままにここにあるのです。私は個体の生命の一つとしてこの永遠のいのちの一翼を担うために信行の日々をこれまでも歩んできました。私の生命は現実の一生にはじまらず、前世、後世、相連絡し単独でなく影響し合い、永遠のいのち（仏）を我が生命の中に融会し互具しているのです。この生命観に生きる私は、必然的に個体の死から私の今ある生を観ていかなければなりません。つまり死は私のいのちの終わりではなく一期の終わりが万世のいのちを生み出すと観ることです。永遠のいのちと出会った私のいのちは、私の死後も永遠のいのちとして生き続けることなのです。それは個体の死を観ることで、いかに生を歩むかを知ることになるということです。釈迦様の教えは生と死は相離れ得ない「生死不二」「生死一如」です。死を知ることによって生を知ることが出来るとの教えです。

5年間私はこの教えのもとに日々を送り、その信行を狂言綺語に綴ってきました。そして128回目の狂言綺語を送り出すために2か月の時間が経ちました。この空白期間は私の生命が新たないのちを獲得するための時間だったのです。昨年11月21日の10時半、私は突如大動脈解離A型を発症し、私の個体は、死の淵を覗き込むところまでに導かれました。救急搬送された病院からまた緊急手術のために埼玉県の病院までドクターヘリで移送され、そこで開胸手術で大動脈を人工血管に置き換える処置を施されました。執刀医の手術前の「手術をしなければ確実に死に至ります」という言葉を最後に麻酔の効果でそのまま意識を失いました。その5時間前に突然の発症で一時意識を失いかけてから、持ち直していた私の意識はそれから8時間、再び私の生命では如何ともしがたい意識の喪失（死）の中にあつたのです。そして深夜0時、3人の白衣の医師が私の枕頭に立ち「先ほど手術が終わりました」との声に醒まされるとともに、私は永遠のいのちに生かされることを身をもって実践する釈迦様の弟子として、この娑婆世界に再誕することとなりました。

再誕から2ヶ月、私は一日のほとんどをベッドで過ごししながら今後の行いの日々のために体力と気力を養うことに努め、釈迦さまが私をすみやかに閻魔大王に引き渡さず、これからも私が個体の生を生きることを容認し、教えの実践を私に委嘱した意味を考えてきました。発症から今日まで私は家族に多大な迷惑と不安をかけ、友人や一緒に活動してくれている仲間にも心配と不便をおかけしてきました。しかしこの期間は、私にとって永遠のいのちの意味は、理解（信じる）することではなく、我が身に引き当てて行うこととはっきり自覚するための必要な時でした。もう私は完全に新たな生を獲得することができました。私の家族も一緒に活動してくれる方も私と縁のあるすべての皆さんとともに、私が得た新たな生を生き続けることをここに願い誓い行っていきます。2ヶ月前と何が変わるのか、ひょっとしたら表面上の行為は変わらないように見えるかもしれませんが。それはこれからの、私の行いによって皆さんにお伝えしていかなければならないことだと思っています。ちょっとだけそれを教えの面から覗いてみれば、再誕前の私は法華経と日蓮聖人の信行の教えの理解が行いでした。教えと今ある現実とのギャップをギャップのままに実践していたのです。つまり理解の上での信行です。しかし今からの私は法華経と日蓮聖人の教えは即信行です。教えが即現実として信行が実践を始めるということです。自らの生活が教えの実践であることを私の生命で示すこと。それが永遠のいのちと一体となることなのです。このことを私たちの現実世界を往来する狂言 琉游舎：戸井 出琉・恭子 綺語の言葉で伝えることの限界はあります。言葉で伝えることの難しさを自 問い合わせ：0287-53-7848 08033508152 覚しつつ、再誕後の狂言綺語で、新たな私の生の獲得を皆さんにお伝えし 矢板市大槻2319-17コーリーナ矢板C-850 ながら、死を知ることが生きることを知ることを意味を考えて行きたいと思ひます。メール：toi101izuru@outlook.jp